重要文化的景観

長良川中流域における岐阜の文化的景観

重要な構成要素（建造物）

正法寺

正法寺の概要

金鳳山正法寺は、江戸時代初期に中国から伝わった黄檗宗の寺院で、黄檗山萬福寺（京都府宇治市）の末寺です。十一代惟中和尚が大釈迦如来像の建立を図り、38年の歳月を費やして、天保3(1832)年に本尊が完成しました。これが「岐阜大仏」として知られる現存する本尊です。詳細は不明ですが、大仏像も同じ頃には、造営が完了していたと考えられています。

正法寺の見どころ

大仏殿の特徴は、金華山を背景として、高さ20.5mの三層の木造建築ながら、東大寺の大仏の像高より約1.3m低い約13.7mある本尊の大仏のために、広い内部空間を持つ仏堂として完成した点にあります。

岐阜大仏

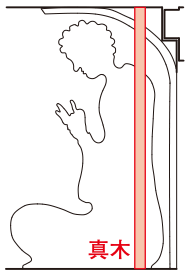
さらに、現在は入れませんが、参拝者が階段によって回廊へと上り、大仏の頭部にあたる高さで正面から参拝が行えるようにしていたことは、他には見られない大きな特徴です。

回廊

回廊から見た大仏

本尊の大仏には、「真木（心木）」と呼ばれる周長6尺（直径約57cm）のイチョウの木の柱が背面にあり、台座から背骨のように伸び、天井まで到達しています。この真木を共有し、貫などで大仏と大仏殿は繋がっているため、一体としてみることが出来ます。

大仏胴体の竹の下地



真木（心木）

また大仏は、塑造漆箔という、木材で骨格を組み、籠を編むように竹で大仏の大まかな形に下地を編み、そこに粘土を塗って一切経の書かれた紙を張り、さらにその上に漆を使って金箔を張るという作り方で出来ています。そのため、大仏は籠大仏と呼ばれており、この作り方では日本一大きい大仏です。近年の調査で、胴体と頭部で竹の編み方などの作り方が違うことなどが分かってきています。

参拝に訪れる多くの方からは、他の大仏に比べ頭が少し前に傾いているため、「正面から拝むと大仏様と目が合う」と親しまれています。

大仏殿は、山上の岐阜城、山麓の三重塔などと併せて近代の鳥瞰図には必ず描かれています。それほど旧城下町の景観の中にとって大仏殿は欠かせない存在であり、現在もそれは変わっていません。岐阜のシンボル的存在であると同時に、文化財としての価値が高いことを評価され、大仏は県指定重要文化財に、大仏殿は市指定重要文化財になっています。

アクセス

〒500-8018 岐阜市大仏町8番地　☎058-264-2760
岐阜バス　「岐阜公園歴史博物館前」バス停下車
南に徒歩約3分

長良川と町を巡る

1 長良川の鵜飼

現在は6名の鵜匠が行っています。

2 鵜匠家

鵜匠が鵜と共に暮らし、そのために必要な施設があります。

3 川原町（川原町屋）

川の中にある集落で、白木の格子が続いています。

4 岐阜公園三重塔

旧長良橋の古材を利用しています。

所用時間　約2時間 / 約4km

「長良川中流域における岐阜の文化的景観」全覧図〔昼〕
奈良文化財研究所景観研究室作成

重要文化的景観

長良川中流域における岐阜の文化的景観

長良川と金華山という豊かな自然に囲まれた町で人々は、長良川を物流の主軸や鵜飼の舞台として、また金華山を政治の拠点、憩いの場として利用してきました。この長良川と金華山、町と人々が一体となって形成してきたこの文化的景観は「岐阜市の原風景」ということができます。

金華山と町を巡る

① 伊奈波神社界隈

岐阜市の総産土神である伊奈波神社などの寺院が多く集まっています。

② 御鮨街道（空棟屋）

鵜飼で捕れた鮎を塩漬けにし、この道を通り江戸まで運んだことに由来します。

③ 正法寺大仏殿（岐阜大仏）

黄檗宗の寺院で、籠大仏と呼ばれる本尊があります。

④ 岐阜城復興天守

現在は、昭和31年（1956）年に造られた2代目の復興天守です。

所用時間　約2時間 / 約3km
（ロープウェイ使用）

岐阜市の重要文化的景観の概要

選定日

平成26年3月18日

選定地域

長良川地区、金華山地区、鵜飼屋地区、川原町地区、旧城下町地区（331.9ha）

長良川と人々

古くから人々は、長良川とともに生活し生業を営んできました。川には多くの川湊が開かれ、材木、和紙などが運ばれました。また今でも伝統的な川漁が行われ、特に1300年の歴史を誇る鵜飼は代表的です。現代の人々は、川遊びなど、憩いの場として長良川を利用しており、岐阜の人々は、いつの時代も長良川と共に暮らしてきたといえます。

金華山と人々

金華山は、戦国時代には斎藤道三公や織田信長公の居城として機能していました。近世になると絵画などで、鵜飼の背景として金華山が描かれる構図が見られるようになります。現在は、毎日多くの人々が山に登り、山頂からの眺望を楽しみ、町の人々は、生活の中で金華山を見上げ、常に山を意識して暮らしています。

人々のくらし

旧城下町は商業により発展し、材木や紙の問屋業や手工業が発生しました。金華山に岐阜城復興天守が造られると、大事な客人をそこでもてなし自らも楽しむために、城が見える位置に本座敷や茶室を置くようになります。また地域の人々は、通りに面した家屋の木部を年に数回水や湯で洗います。この習慣により、白木の格子の町並みという独特の景観は維持されています。

発行：岐阜市教育委員会社会教育課　〒500-8720 岐阜市神田町 1-11　TEL.058-214-2365